



多発性骨髄腫治療 におけるチーム医療

第9回 埼玉医科大学総合医療センター(埼玉県川越市)



埼玉医科大学総合医療センターは、のどかな田園風景が広がる埼玉県川越市郊外に立地する。地域に根ざした病院でありながら、地域の三次救急を担う高度救命救急センターと埼玉県で唯一の総合周産期母子医療センターを有し、平成19年からはドクターヘリの基地となり、災害拠点病院になっている。

木崎昌弘先生率いる埼玉医科大学総合医療センター血液内科は、「田んぼの中から世界を目指す」を合言葉に、国内の造血器腫瘍の臨床試験を牽引している。数多く実施される試験の遂行に欠かせないのが複数職種との連携である。今回は、教授の木崎先生を中心にしたチームメンバーの役割や今後の展望などについてお話を伺った。

地域に根ざし、最先端の医療を提供するために

木崎 当院は、「安全で質の高い医療を提供し、地域から信頼される医療機関を目指します」を基本理念とし、地域に根ざし、かつ最先端の医療を提供することを目指しています。

当院は地域がん診療拠点病院なので、われわれ血液内科の血液疾患診療も病院の中心的な役割を担っています。平成25年度の1日平均外来患者数



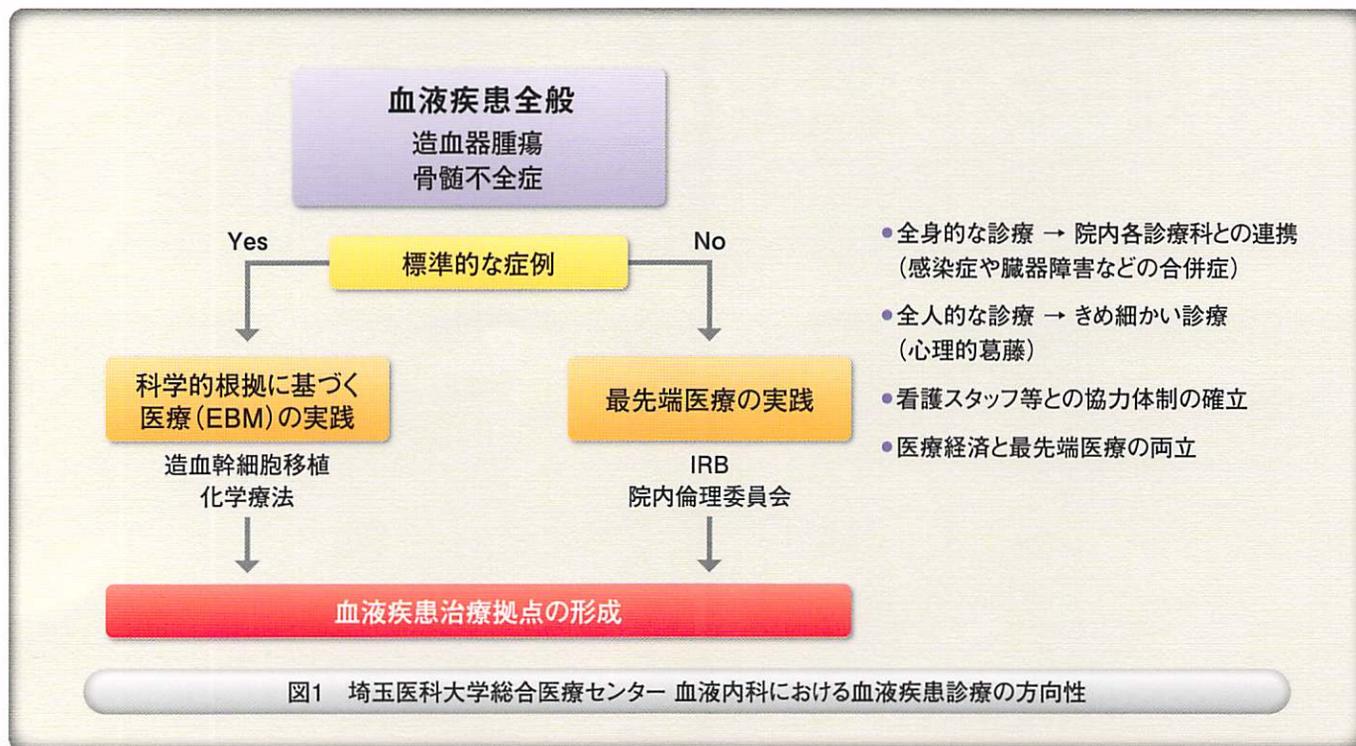
埼玉医科大学総合医療センター
血液内科 教授
木崎 昌弘 先生

は、病院全体で2,168人のうち血液内科は58人、1日平均入院患者数は、病院全体で842人のうち血液内科では32人でした。

当科では造血器腫瘍や骨髄不全症などの血液疾患全般を診療しており、標準的な症例には科学的根拠に基づいた標準治療を実施します。移植医療は、すべての造血幹細胞移植ができるような体制を整えています(図1)。

一方で、実臨床では標準治療で対応できないような患者さんも数多く存在します。既存治療では救えない患者さんに対しては、最先端医療である臨床試験が救済手段の1つになるのではないのでしょうか。われわれが臨床試験に力を入れるのは、そうした思いが根底にあります。

数多くの臨床試験の遂行には、チーム医療が非常に大きな役割を果たしています。治療を担当するチームは、医師、看護師、薬剤師、治験コーディネーター(CRC)を中心に構成され(図2)、



臨床試験においてはCRCの役割が重要になってきます。当科では、製薬企業主導型の臨床試験(治験)には治験支援施設のCRCである鈴木さんが、医師主導型の臨床試験には当科のCRCである大山さんが担当しています。

試験遂行に必須な 検査のスケジュール管理を担うCRC

木崎 当科では、毎週月曜日にCRCを交えてカンファレンスを行い、実施中の臨床試験についてアップデートしたデータをレビューしつつ、情報共有しています。

臨床試験には申請書をはじめとした多くの書類の事務的な手続が必要ですが、CRCはそれらの作成・管理や検査スケジュールの管理を担ってくれています。



血液内科 治験コーディネーター
大山 希美子 さん

大山 例えば、「この日はこの患者さんにこの検査をしてください」など、患者さんごとの検査スケジュールを電子カルテにあらかじめ入力しておきます。

富川 臨床試験では検査日が厳密に決まっており、項目に1つでも漏れがあると正確な解析ができないこともあるので、検査スケジュールの管理は非

常に重要です。CRC不在の時代には、検査の期日を逃してしまったこともありました。

そうした時代に比べると、現状のチーム医療体制には非常に感謝しています。医師がすべてを行わなければならない状態ではなく、さまざまな職種の方々が支えてくれており、確実に仕事をしやすい環境が整っていると思います。



血液内科 助教
富川 武樹 先生

新薬導入の臨床試験に欠かせない、 CRCによる患者さんとの対話

木崎 新薬の開発を目的に実施される治験においては、患者さんに対する説明が特に重要です。われわれ医師もちろん説明は行いますが、なかなか十分な時間がとれません。そこで、別途、投与する薬剤の特性や副作用などについてCRCから詳しく説明してもらいます。

鈴木 新しい薬はやはり不安



治験コーディネーター
鈴木 恵美子 さん
(株式会社イーピーメント)



良い医療を行うために：チーム医療の実践

チームC 基礎研究者 製薬企業 学会など

チームA 治療を担当するチーム

医師(血液内科医)
看護師
その他の専門医
薬剤師/栄養士/理学療法士
治験コーディネーター



チームB 患者さんを支えるチーム

患者家族
ボランティア
ソーシャルワーカー
患者会、患者家族の会

診断のためのチーム
検体検査/病理/検査技師

医師の役割=チーム全体を統括して正しい方向へ導く

図2 埼玉医科大学総合医療センター 血液内科で実践されるチーム医療

に感じられる患者さんが多いので、できたら一番聞きたくないと思われる、副作用に関する情報についてわかりやすく説明するように工夫しています。また、こちらから一方的に説明するだけでなく、「ほかに聞きたいことはないですか」と必ず何度も確認をとるようにしています。

病棟薬剤師による患者さんとのコミュニケーションや副作用マネジメント

木崎 抗腫瘍薬導入後の患者さんとのコミュニケーションや副作用マネジメントには、薬剤師が重要な役割を担っています。

米丸 病棟薬剤師は、抗腫瘍薬を導入するすべての患者さんのレジメン登録、投薬期間や投薬量の確認と服薬指導、そして副作用発現状況の確認が主な業務です。これらの情報は外来化学療法室と連携して管理し、電子カルテを通じて医師や看護師と情報共有しています。



病棟薬剤師
米丸 明子 先生

副作用については、導入前にパンフレットなどをお渡しし、「こういう症状があったら連絡を」という説明をしています。また、患者さんが副作用に気づいていない場合もあるので、「こんな症状はないですか」と

いうことを意識して聞くようにもしています。さらに、薬剤部では電話による問い合わせを24時間受け付けています。

木崎 ボルテゾミブの場合、特に手指のしびれなどの末梢神経障害に注意しています。現在、当科でボルテゾミブ治療中の患者さんはほとんど皮下投与ですが、Moreauらの報告にもあるように、静脈投与と比較すると末梢神経障害の発現が大きく低下したと感じています。

全国有数の登録数を誇る血液疾患症例登録の管理にもチームが貢献

木崎 臨床試験のほかに当科が注力していることに、疾患症例登録があります。

日本血液学会が推進する血液疾患データベースである血液疾患症例登録システムに参加しており、当科の2013年の登録数は全国2位でした。

登録業務は主にデータマネージャーが担当し、当科を受診したすべての患者さんを登録し、疾患ごとにデータを管理してくれています。膨大なデータの管理は医師だけではとてもできませんので、これもチーム医療のなせる業だと思います。

富川 当科で疾患症例登録を始めてから10年ほどになります。開始当初は、ノートに書き込むというアナログな手法でした。今はシステム化され扱いが容易になったものの、データはすべて患者さんの個人情報なので、管理には非常に気を使っています。

埼玉医科大学総合医療センター 血液内科

— すべての病める人に 満足度の高い医療を行うために —

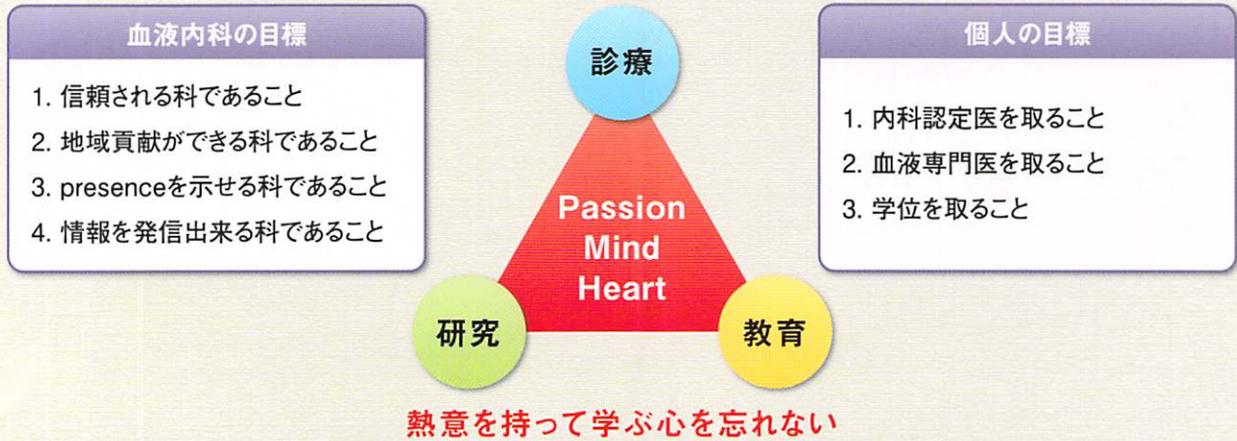


図3 埼玉医科大学総合医療センター 血液内科の目標

治験から得られた結果を日常診療に還元し、 日常診療からの課題を臨床試験で実証する

木崎 新薬開発を目的とする治験は、比較的状态が安定している患者さんが対象となるため、ある意味では特殊な医療といえます。ところが、日常診療に訪れる患者さんには、必ずしも治験のデータが当てはまるわけではありません。ですので、当院では新薬の開発だけでなく、承認薬剤の日常診療での課題解決としての医師主導型の臨床試験も重視しています。

今後も、日常診療での課題を解決するために医師主導型の臨床試験は推進していきたいと思います。どんな薬剤でも改善すべき点があります。それらの点に対する解決策を臨床試験として実証し、その結果を日常診療にフィードバックすることがわれわれの任務だと考えています。

すべての病める人に 満足度の高い医療を目指す

木崎 私は、当科の目標として、信頼される科であること、地域貢献ができる科であること、プレゼンスを示すことができる科であること、情報を国内外に発信できる科であること、の4つを掲げています(図3)。

信頼される科であるべきことに対しては言うまでもありません

が、ここは地域の病院ですから、地域への貢献を最重視しています。血液内科は専門性が高く、標榜している施設も限られます。ですので、診断から治療まで一貫した自己完結型の医療提供を目指し、当院を受診する患者さんには最高の医療を提供したいと考えています。

情報発信は、当科の研究結果を学会や論文で発表し、われわれが何を思ってどんな課題を解決したかという成果を世に問うていくことを指しています。信頼され、地域貢献し、さらに情報を発信していくことが、最終的に当科のプレゼンス向上につながるのではないのでしょうか。

血液疾患は、残念ながら命にかかわってしまうことも少なくありません。そのような場合でも、患者さんには当院で治療を受けて良かったと思ってもらいたいのです。最先端の技術による「治癒を目指した治療」だけでなく、心で接する「優しい治療」を提供し、すべての患者さんに満足度の高い医療を提供できる病院を目指していきたいと思っています。

[参考文献]

1) Moreau P, et al.: Lancet Oncol. 2011;12(5):431-430



Your HAPPINESS Is Our HAPPINESS ～日本のMayo Clinicを目指す～

木崎 埼玉医科大学のミッションは、「Your HAPPINESS Is Our HAPPINESS」ですが(図4)、この背景には「日本のMayo Clinicを目指す」という大学の強い思いがあります。ご存知のとおり、米国Mayo Clinicは優れた医療施設として有名ですが、その理念は「The needs of the patient come first」。

Mayo Clinicはミネソタ州のロチェスターという田舎にあるのですが、来院患者数が非常に多く、最新の医療技術・サービスを提供しています。私も見学に行きましたが、特に医療サービスの迅速さが印象に残っています。例えば、コンサルテーションは電話1本ででき、合併症を有する患者さんには診療科をまたいだ診療体制が確立されています。検査は、結果が当日中に受け取れるため、患者さんは遠隔地にある病院に頻繁に来院する必要がありません。

「The needs of the patient come first」を実践した医療を目の当たりにし、患者さん第一の医療の重要性を再認識しました。

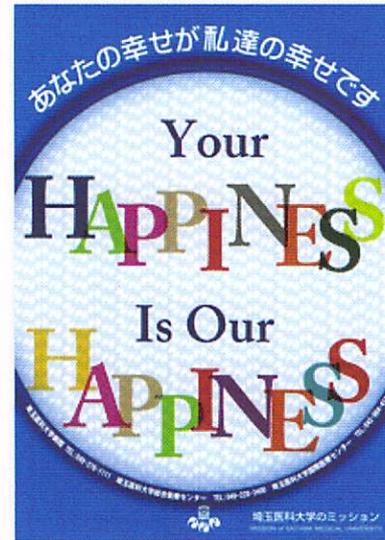


図4 埼玉医科大学のミッション

